

# 子ども・子育て支援フォーラム

みんなで子育て！

～家族で、地域で、みんなで～

## アーカイブ

横浜市では、地域全体で子ども・青少年を育てる社会を目指しています。今年度も、地域で子ども・子育てを支える機運の醸成を図るため、「子ども・子育て支援フォーラム」を開催しました。

### 第1部

### 基調講演「みんなで子育て！～これからどうする？～」

講演者 大日向 雅美 氏 恵泉女学園大学学長  
NPO 法人 あい・ぽーとステーション代表理事  
横浜市子ども・子育て会議委員長

第1部では、大日向雅美氏をお招きし、「みんなで子育て！～これからどうする？～」と題した基調講演を開催しました。子どもや青少年、母親、父親、祖父母等が直面する課題や、「みんなで子育て」を実現していくために必要なことについて、これまで見聞きされた事例やご経験を交えながらお話いただきました。

・「子ども・子育て支援新制度」や「女性活躍推進法」、児童虐待防止対策の強化を図るための児童福祉法の一部改正など施策の整備は進んでいるが、それにより、改めて子どもや親、子育てに関連する方々の辛さが可視化されてきていると感じる。

・**母親が心から子どもを愛することができるためにこそ、三歳児神話から解放されるべきである。**

・三歳児神話の三本柱のひとつである、「子どもの成長にとって、3歳までが非常に大切」というのは、とても大事なこと。幼少期に愛される経験をすることで、他者への信頼感と生きていく力を育むことができる。

・二本目の柱である「母親が養育に専念すべき」というのは間違い。母親だけでなく、父親や祖父母、保育者等からの責任感のある愛情に守られることが必要。

・三本目の柱「母親が育児に専念しないと、心身の成長にゆがみをもたらす」というのは、エビデンスに基づいたしっかりとした検証が必要。アメリカや日本での研究を精査したが、母親が働いているか専業主婦かだけで、子どもの成長・発達に影響を及ぼすことはないということは、はっきりと言える。しかし、子どもとしっかり向き合おうという母親の心構えや、母親をサポートする家族や地域の存在、良質な保育、子育て世代のワーク・ライフ・バランスを守れるような雇用が必要。

・つまり、三歳児神話を考えるということは、社会みんなで子育てを考えることに他ならない。子育て支援や女性活躍を考えるということは、社会みんなで子どもたちのことを考えることにつながっていく。

・**子育て支援に、哲学を持ってほしい。**例えば、体罰を禁止する法律が制定された。法律は大事だが、もっと大切なことは法律に魂を入れること。叩かれた子どもの痛みをみんなで分かちあって体罰をしない、ということを大人が、社会の皆が身体に沁みこませるように理解することが大切。同時に、手を挙げてしまう親への支援も忘れてはならない。

・**子育て支援を、ただ子どもと母親の支援だけではなく、平和な社会、全ての人が生きやすい社会につなげていきたい。**そして、一人ひとりが、誰ひとり残されずに保障される社会を作ることにつながっていく。そのためには、愚直なまでに、辛いことや悲しいことを経験している方に心を寄せ、声を聴くことが大切。それを「みんなで子育て」という言葉で、置き換えて考えたい。

パネラー	池田 浩久 氏	パパライフサポート代表
	棒田 明子 氏	NPO 法人 孫育て・ニッポン理事長
	山田 美智子 氏	西区地域子育て支援拠点スマイル・ポート施設長 横浜市子ども・子育て会議委員
ゲスト	燕昇司 利胡 氏、奥田 一輝 氏、西江 瑞帆 氏	
コーディネーター	大日向 雅美 氏	

第2部では、パネラーとして、父親育児支援に携わる池田浩久氏、孫育てをはじめとした地域の子育て支援活動を行っている棒田明子氏、地域子育て支援拠点の施設長として子育て支援の現場に立たれている山田美智子氏をお迎えし、「みんなで子育て！～未来にむけて～」と題したパネルディスカッションを開催しました。冒頭で、地域で行われている子育て支援活動の事例をご紹介しながら、それぞれの活動を通して見る子育ての「今」や、「みんなで子育て」を実現するために必要なこと等について、お話しいただきました。また、ゲストに子育て支援拠点で活動する学生3名をお招きし、若い世代が子育てに対して感じていることについても伺いました。

### 主なご発言

- 池田氏 ・ 父親学級を開くと、「ママに言われて来た」という方が一番多い。必要な時に必要な情報は届かず、また、父親に情報が届くのは時間がかかると感じている。
- ・ 自分自身も、地域子育て支援拠点はママたちの世界だと思っていて、なかなか扉を開けられなかった。ホームページでパパたちがサークル活動をしているという情報を見て、行っていいものだと気付いた。
  - ・ 現役パパとしては、今でも手探り。父親育児支援は、機運が上がっていかないと、なかなか動いてくれない。明るい、子育てをしやすい未来に向けて、ファザーリング・ジャパンで企業での「イクボス宣言」を仕掛けるなど、一歩ずつアプローチを積み重ねていきたい。
- 
- 棒田氏 ・ (夜間の居場所について) 介護予防施設で、施設が利用されない時間帯に開放して、地域の居場所となるような活動をしている。施設有効活用も、ひとつ方法としてあるのではないか。
- ・ どの世代に何を伝えるのが課題。関心が無い時に情報を伝えても響きにくい、辛くなる前に一度でも情報に触れているかどうか大きい。企業の新人研修や大学・高校と、若い世代から少しずつ情報を伝えて、どこかで引っかかってくれると良い。
  - ・ 子育ての話をする、当事者たちが騒いでいるだけ、と言われることもあるため、エビデンスをしっかりと整えるようにしている。そのために、大学や病院の先生等、思いを同じくしている方たちとモデルケースを作ったり、データを取ったりし、チームとして進めていけるようにしていきたい。
- 
- 山田氏 ・ 夜間の子どもの居場所は足りていないと思われる。ユースプラザの開館時間や、青少年の活動拠点の数がもう少し充実できると、少しだけでも夜間に利用できる時間が長く出来るかもしれないので、是非行政に取り組んでもらいたい。
- ・ 子育ての広場に行きにくい人、あるいは行くのに抵抗があるという方がいらっしゃるということは、常に課題だと感じている。広報の出し方にも工夫が必要。また、活動する中でも常に、子育て広場に来にくい人、心理的に距離を感じている人がいるということ忘れずに取り組むようにしている。
  - ・ 横浜最初の子育て広場「びーのびーの」は、約20年前に親御さんたちが立ち上げたところから、国の施策が変わっていったという大きな事例であり、大きな結果。

大日向氏：コーディネーターを務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。第二部のパネルディスカッションは、地域に暮らす誰もが、子育てに対する理解を深めて、温かく見守って手を差し伸べる社会がどうあるべきか、ということを考えていきたいと思います。「みんなで子育て～未来に向けて～」をテーマに、地域での取組事例を交えながら進めていきたいと思います。会場のみなさまが、地域での子ども・子育て支援についてお考えになる機会になれば幸いです。それでは早速ですが、本日のパネリストのみなさまに、自己紹介をお願いできますでしょうか。

～パネリスト自己紹介～

～横浜市から地域における子育て支援の取組事例（※）～

大日向氏：さて、ここから学生の皆さんの出番です。まずは、皆さんの目から見て、横浜の子育てはどのようでしょうか、住みやすいのか、こんな希望がある等々について、どんなことでも仰っていただけたらと思いますが、その前に、まず、皆さんなぜ、今日、ここにいらして下さったのか、聞かせてくださいませんか？

西江氏：私は、「おやこの広場 びーのびーの」でインターンシップをやらせていただいています。それがきっかけで、今ここにいます。「びーのびーの」でインターンをする前に、地域子育て支援拠点の「どろっぷ」さんで、中学校3年の頃から夏休みだけボランティアをしていて、5年くらい子育て拠点等で活動させてもらっています。

大日向氏：中学生からボランティアをなさっていたのですね。お母様かどなたかが誘ってくださったのですか？

西江氏：いえ、学校でボランティアの募集みたいなのがあって、そもそも子どもが好きだったので、子どもと関わりたいだけの気持ちで。ちっちゃい子と遊びたいくらいで、最初は。

大日向氏：そういう中学生や学生さんを受け入れる場合は、「びーのびーの」さん始め、横浜市さんにはたくさんあるのですか？

山田氏：はい、子育て支援拠点や親と子のつどいの広場や、あるいは地域のサロンなどでも学生さんのボランティアとか応援はウエルカムになっていると思います。

奥田氏：私は、1か月という短い期間でボランティアとして、「びーのびーの」さんに関わらせていただいています。また、その他にもプレイパークや、他の子育て支援拠点でボランティアをさせていただいて。私が子どもの頃は、それぞれ地域のおじいちゃんおばあちゃんと遊んでもらったり、そうい

う経験があったんですけども、今なかなかそういう姿を見られないので、少しでもこういう機会を通じて地域で子育てしやすくなればな、と思って参加をさせていただきました。

燕昇司氏：私も西江さんと同じく「ビーのビーの」でインターン生として活動させてもらって、そこで声をかけていただいて、参加しました。インターンでは、大学の授業で学ぶ以外に、現場というか生の声を聴く機会が本当に多いので、こういう場に参加して、地域と行政とのつながりが知れたらいいなという思いで参加しました。

大日向氏：みなさんに共通しているのは、インターンとかボランティアで、子育て支援拠点や子育て広場に行ってらっしゃるということですね。池田さんは、お若い時、そういう活動をなさいました？

池田氏：私自身が何かやったかという、そんな記憶は実はあまりなくて、私は技術系のSEだった経験があるのですが、そういうものとはかけ離れていましたね。ですから、全然経験がなかったですね、父親になるまで。

大日向氏：そういう池田さんからご覧になって、どうですか？今の若い方々の活動はどう見えますか？

池田氏：ちょっとお聞きしたいなと思っていたんですけど、子どもたちが、子育てを経験する機会がない、私もほとんどなかったんですけど、子どもが4人いて、一番下の子をミルクで育てることになったんですけど、哺乳瓶って空気穴を上に向けなきゃいけないんですけど、下を向けていたら、長女が「パパ違うから」ってやってくれて。なんか子育て経験がないなってその時思ったんですけど、3人の方はどうですか？近所の子どもの面倒を見たりとか、そういう機会があるのかな、というのがちょっと知りたい。

燕昇司氏：私は、弟がいるので、おむつを替えるとか、ミルクをあげるとか、離乳食を食べさせるとかっていう経験はしました。

奥田氏：私は、ひとりっこのので、なかなか子どもたちと関わる機会と言うのはないですけど、家の近くに公園がありまして、そこで地域の小学生たちと遊ぶという経験はあります。

西江氏：私も妹がいて、抱っこしたりとかおむつ替えしたりとか、お母さんのお手伝いしたりとかで、子育て経験だったり、お母さんのサポートっていう面も経験はしていました。

大日向氏：有難うございます。さて、皆さんは保育の勉強をしてらっしゃるし、インターンシップやボランティアで子育て広場等にも行ってらっしゃいますね。さらにお育ちになったご家庭でも子どもに触れたり、子育ての経験がおありになりますね。一人っ子さんもいらっしゃいますが、保育の勉強をされている。子どもや子育てのことがとても身近な皆さんからご覧になって、横浜は子育てしやすい街ですか？あるいはここをもうちょっと変えてもらうといいとか、希望や評価などおありになりますか？

奥田氏：小学校になってからなかなか居場所が無いということで、「小1の壁」だったり、あるいは小学校4年生からなかなか学童に入れないという「小4の壁」なんて言われ方もしますが、そういう

ので横浜市さんは色々取り組みをされているので、本当にそこはすごく子育てしやすいのかな、というのを感じています。一方で、夜間に利用できる施設と言うのがどれくらいあるのかな、ということで、私自身横浜に住んでいないのであまり詳しくないんですけど、共働き家庭の方でしたら恐らく夜間に利用したいということもあると思うので、そちらの取組を知れたらいいなと思っています。

大日向氏：このことにお答えいただける方はいらっしゃいますか？夜間保育について知りたいということとは、共働きを考えていらっしゃるのですね。山田さんお願いいたします。

山田氏：乳幼児の支援に関しては、やはり日中のみということになるんですが、今問題なのは、平日働いていらっしゃる方がほとんどなので、乳幼児の居場所も土曜日や日曜日に開けた方がいいのではないかという議論があるのは確かだと思います。あと、小学生、青少年期になると、放課後の過ごし方と、仰った通り、夜間ですよ。放課後の居場所については、横浜市の公立小学校では、全校これから放課後キッズクラブに変わっていきますし、民間の学童や、地域の昔ながらの学童クラブもあると思いますが、夜間はどうか、というと、まだまだ足りないと思います。例えば、ユースプラザが何時まで開いているのかとか、青少年の活動拠点がこれから各区にもう少し充実出来たら、少しでも夜間の時間は長くなるかもしれませんので、そこは是非行政の方に青少年の活動拠点をお願いしたいと思います。

大日向氏：有難うございます。さて、この会場に「びーのびーの」の方、いらっしゃっていませんか？「びーのびーの」さんでは、親が仕事帰りに拠点に寄って、しばらくお子さんとともに過ごしながらかうちに帰る、というような取組みをしていらっしゃるとうかがったことがあるのですが、もしよろしければちょっとご紹介していただけますか？

「びーのびーの」畑中氏：こんにちは。「びーのびーの」の畑中と申します。今ご紹介いただいた「家族シュミレーション」という事業は、期間限定で、夜6時から8時まで2時間を開けまして、そこに会社の方は立ち寄ってください、という形にしたんですね。広場を卒業して保育園に通っているんだけど、広場に寄っていいですよ、寄って、今日来られる方々に、今どうやって暮らしているの？っていう、保育園の工夫だったりとか、会社を休業している間にどういうスキルを身に着けるかとか、そんな話をしてくださいね、と言う風にしたら、2カ月間、週2回で、どんどん寄って帰られる保育園のお母さんたちが増えました。そのうち、広場は使っていないんだけど広場を使っていたお母さんに連れてこられるお母さんとかも出てきて、どんどん人が勝手に増えていくということが起こりまして、これは、もしかして夜間子育て広場を使いたい人たちは、もっと潜在的にいるんじゃないかなということに気づかされたところです。

大日向氏：有難うございます。

棒田氏：同じ港北なんですけども、仲間がチャレンジしているのが、介護の予防でB型施設というもので、日中は要支援1・2の方たちが通ってくるという場があるんですけど、そこを、時間を変えてお母さんたちが集まる、なおかつ夕方から夜は、働いているお母さんでもお父さんでも、それから地

域の人でも、と言う形で、オープンにしています。そうすると、働き終わってからいらっしゃる方もいらっしゃいますし、小学校行った後習いごと行って、終わって帰ってくる小学生もいらっしゃるので、介護拠点になっているところの有効活用っていうのも、ひとつ方法としてあるのではないかなと思っています。

大日向氏：有難うございます。今、「びーのびーの」さんと棒田さんのお話を伺って、すごく新しいなと思ったのは、共働きで夜遅くまで子どもを施設が預かる、ということではなくて、親が仕事帰りに子どもと一緒にちょっと寄れる場所とか、あるいは介護の施設が子育て支援もするなど複合的にいろいろなことをしていらっしゃいますね。新しい可能性がたくさんある取組みだなど、私もとても勉強になりました。有難うございます。他にいかがですか？

燕昇司氏：私は「びーのびーの」でインターンとして活動しているので、今の年齢から子育てのイメージをつかめるといふか、困ったときにこういう広場に行ったら他のお母さんとかと情報交換したり、スタッフの人が寄り添って話を聞いてくれたり、という場を知っているから、子育てに不安とかは今は無いですけど、知らない人とか、学生もそうだし、今子育てをしているお母さんとかでも、行くのに抵抗を感じている人もいるかもしれないので、そういう人たちにどう働きかけて寄り添っているのかなというのを聞きたいです。

大日向氏：大切なことですね。私もぜひ、うかがいたいです。このことについては山田さんと棒田さんにそれぞれお答えいただければと思います。それから、池田さんに今のことと関連して伺いたいの、子育ての経験がないということは、特に男性のみなさんは大方、そう言いますね。そういう男性をどうやって子育ての活動に誘って、お仲間をお作りになったのかも、教えていただけますか。

山田氏：子育ての広場に行きにくい人、あるいは行くのに抵抗があるという方がいらっしゃるといふことは、いつも私たちの課題です。その方々に向けて子育ての広場は誰でも来ていいところだよ、ということをどうやってお伝えするか、ちゃんと届くような情報の出し方をしなくてはいけないと考えながら、10年やってきて、それはずっと大きな課題です。赤ちゃんが産まれたら生後4か月未満に、全てのご家庭に訪問してくださる「赤ちゃん訪問」の訪問員さんがいらっしゃいます。訪問員さんに情報を託すのがいいのか、あるいは、今の世代はSNSやWeb上で紹介するのがいいのか。それでも届かない場合もあるし、心理的にとても距離が遠いなど感じている場合は、やっぱり私たち広場のスタッフが、地域に、例えば先ほどご案内のあった「万歳サロン」のようなところに、拠点のスタッフ・広場のスタッフが出向いて、「こんなおばちゃんがいるよ」という様子を、一緒に体験してもらって、是非よかったら足を運んでみようかな、という最初のきっかけになるといいなとか、いろんなアプローチを考えながらの10年でした。「これが良いだろう」という答えもないまま、いろんなことを手探りで進めている、という状態ですが、常に、子育て広場の現場に来にくい人、心理的に距離を感じている人がいるっていうことを、私たちは忘れてはいけないって思いながら、スタッフの研修会を行う、あるいは地域の方々に、「是非地域で声をかけてください。一緒に子育てしましょう。」

という社会を作るために、地域の方々と勉強会を開催する、ということ積み重ねてきた、そんな10年だったように思っています。

棒田氏：私は、色々なところに伺わせていただくことが多いのですが、どの世代に何を伝えていくのか、関心が無い時に伝えてもその情報がなかなか入らないという課題が私の中では一番大きくて。でも、しんどくなる前に一度情報に触れているのかいないのかということが、ものすごく大きいと思うんですね。取組としては、まず一番初めは、産婦人科でもっと地域の情報を提供してもらえないか。でも、産婦人科の先生たち、もしくは受付の方たちにお話しをすると、「産婦人科って、ひとつの区、もしくは同じ市町村の人が来るわけではないので、一か所の情報だけ置くことって難しいんですよ。」「情報の更新の責任って誰が持つんですか。」って言われました。でも、じゃあそこで無理なら他の方法と思い、現在、病院のプレママ・プレパパスクールで、地域の情報を発信しています。一番そこが近いかな、と思うんですが、それでもやっぱり出産前なので、出産後のことはなかなかインプットされないし、実際に居場所に行く人も正直少ない。じゃあ、産婦人科より前って言ったらいつだろうと思って、今少しずつやっているのが、全員が必ず受けるというところでは、企業の新入社員研修。それから、もうちょっと前から触れてほしいなと思うと、大学のライフデザイン。それから、もうちょっと前、というと、高校の家庭科の授業。そこまでちょっとずつちょっとずつ、前の世代から少しずつ情報を入れていって、それがどこかで引っかかってくれたらいいな、というようにしています。

池田氏：父親学級をすると、多くのパパさんは「ママに言われてきた」というのが実は一番多いんですね。なかなか手が届かないところだと思うんです。棒田さんもおっしゃったとおり、必要な時に必要な情報ってなかなか届かないんですね。なので、「パパ講座をやります」といったときに、その情報はすぐに届くわけではなくて、やはり情報に敏感なのはママなので、ママから、というのが一番多いですね。それから、プレパパ講座をやる時は、直接「こういう場所があるよ」と私の方から情報発信しています。私も棒田さんと同じ意見だなと思ったのは、学生とか新社会人とか、なんで子育ての話聞くのはプレパパが初めてなんだろって私は思うんですね。両親教室が実は私も初めてだったんですけど。両親教室自体の拡充も必要なのかなと思ったりもするんですけど、触れる機会ってないんだろうなと思ったりしますね。なのでもっとそういう機会があってもいいのになと思ったりします。

大日向氏：池田さんが仲間を募ったとき、男性たちはずっと集まってくれたのですか？

池田氏：仲間を集めるというよりは、各区ですでに、いろんなパパサークルとかあるんですね。そのメンバーでつながっていることが多いのと、子育て支援拠点「はっち」の取組で、当時パパのボランティアを集めていたという取組がありまして、その時実は私、子育て拠点に行けない人だったんです。その扉を開けられない人だったんですね。ママたちの世界だと思っていたので。だからホームページ見てたら、パパたちが何かやってるよという情報を見て、「あ、行けるんだ」ということに気づい

たんですね。それまではそこまで詳しくなくて。何かのきっかけがあって、そこに行くことが出来たと。

大日向氏：有難うございます。さて、パネリストの方から、若い世代に何か聞きたいこととかありますか？もっと若い人にこうしてほしいとか、今の若い人は私たちと違って、こういうところがいいわね、とか。

棒田氏：皆さん今、20歳前後じゃないですか。10年後ってどんなイメージを、自分はどんなことをしてるかな、なんて、もし（あれば）。

大日向氏：いきなりですが、西江さん、どうですか？

西江氏：10年後、たぶん保育現場で働いているんだろうなあぐらいしか今のところはなく、保育現場で多分5年経たないくらいなのかなあって。それこそ私はNPO法人の存在も知っているから、そっちも行きたいななんて視野に入れていたりして色々迷っているんですけど、30前後になると多分「結婚は？」とか「子どもは？」くらいの年なんだろうなと思っていて。自分自身も子育てはしたいと思っているし、結婚出来ればしたいなとも思っていて、だから、それぐらいしか、ふわふわとしたことしか無いんですね。

大日向氏：ハードルは高そうですね？ 子育てとか結婚は、西江さんにとって・・・。

西江氏：そうですね。友達とかとも「結婚するの？」とか、そういう話は出ていて。友達の中で、専門学校の子が「結婚はしたくないけど、子育てはしてみたい。子どもは欲しい。」って言っている子が結構大多数いて、それ、私にも分かるなって。恋愛面倒くさいし、でも子どもは好きだから自分の子どもは欲しいってところがあって、そこ悩みだねって。その壁ってどうすればいいんだろうなって、こういうところに携わっていて、パパママで来ていて仲良さそうだなって、子ども楽しそうだなっていうのを見ていると、その壁ってなんかあるのかな、と感じています。

大日向氏：大変な時代になりましたね、奥田さん、どうしましょう？ 女性たちは子どもは欲しい、子育てはしたい、でも、結婚は面倒くさいって・・・。どう思いますか？

奥田氏：そうですね、私の場合は周りでも結婚してすでに子どもがいる友人もいまして、でもその中で、やっぱり子育ては楽しいって聞いているので、もちろん自分自身子育てしていきたいっていうのもあります。10年後の話になれば、おそらく幼稚園教諭として働きつつ、地域の居場所づくりというのもしなければいいなというのは考えているところです。

大日向氏：そうですね。なんか、私、質問ずらされた感じがしてますが（笑）。ここはやっぱり池田さんの出番ですかしら。女性たちが、子どもは欲しいけれど結婚に踏み込みがたいというのは、やっぱり男性の在り方とか、夫婦の在り方とか、良いモデルが少ないのかしら。そんなことないのかしら。ファザーリング・ジャパンなどなさっていて、男性から見て、今の少子化の原因の一つは、男性たちにもあるとお思いますか？それとも、そんなことないかしら？



池田氏：確かに、恋愛とか結婚に対するイメージというのは、なんとなく持ちづらいのかなというのは思うんですね。例えば、一般的に見ても、昔って、アイドルって年齢が自分より上だった気がするけど、今って小学生の子が普通に出てるし、なんかイメージが掴みづらいなって。私が思春期の時って、見たことあるドラマが「東京ラブストーリー」だったんです、織田裕二が主演の。その時に、なんとなく結婚とか恋愛のイメージが作られた。そういうのって、メディアでも色々あると思うんですけど、多様化ですごく複雑になったことがひとつあるのかなとは思っていて。あとは、私は両親が仲が良かったので、結婚のイメージは全然悪いものはなかったです。

大日向氏：それでは、もう少し学生の皆さんにうかがいましょうか？ 燕昇司さんの10年後は？。

燕昇司氏：10年後はちょうど30歳くらいなので、イメージでは、30歳までに結婚するみたいなのが、周りの友達とか私もそうなのかなあって思っているんで、30歳までには結婚する相手と出会ってるかなと。

大日向氏：横浜で子育てしたいですか？

燕昇司氏：それはしたいです。

大日向氏：どうして？

燕昇司氏：地元が横浜だし、あと、自分が育った街だから、自分が育った街で暮らしたいっていう思いはあって。仕事も横浜でできたらいいなって思います。

大日向氏：うれしいですね。他にどうですか？

池田氏：今聞いていて思ったんですけど、少し前まで、第一子の出産年齢が30,31くらいになっているんですけど、今イメージを聞いていると、30くらいで結婚ということで、どんどん延びてきているような気がして。結婚のイメージっていうのは、私は20代前半にあったんですけど、そうやって結婚のイメージがどんどん先になっているって気になったんですが、学生さんにお聞きしたいのが、結婚する年齢っていうのは、先ほど燕昇司さん30くらいと言っていましたけど、皆さん同じなんですかね？

燕昇司氏：大学を卒業して社会に出て、落ち着く年齢が30なのかなっていうイメージ。

池田氏：キャリアを積んで？

燕昇司氏：そうです。そういうイメージで、だいたいそれくらいで結婚するのかなっていう漠然としたイメージ。

奥田氏：私自身も現場に入ってから落ち着いて、ということを見ると、それくらいの歳になるのかな、というのは思いますし、やはりあとは、子どもを育てるとなったときに、それなりのお金も必要になってくるので、そういう面も色々考えると、それくらいかな、という風に思っています。

西江氏：そうですね、私もみんなと同じで28後半から30くらいがいいのかなあとは思って、そこらへんが多分ベストな時期なのかなって、経済的なこととか、自分のキャリアとか、精神的な面であったりとか、そのあたりが安定してきて、結婚とか子育てを考えられる時期がそのあたりなのかなっていう、本当に漠然としたイメージ。

池田氏：じゃあ、もうひとつお聞きしたいんですけど、結婚して、やはり仕事は続けるだろうというイメージが強いのかなっていうのと、やっぱり周りもそうなのかなっていうのもお聞きしたいんですけど、昔は結婚したら仕事を辞めるって人が多かったので、今はそういうイメージって全然ないのになって、ちょっと思っています。

西江氏：私自身はもし結婚しても続けたいって思っているし、子ども産んで育休入って、また現場復帰もしたいと思っています。私自身がひとつのことだけずっとやっていると参っちゃうっていう性格もあるので、そういうのも踏まえて、仕事も続けながら子育てをしたいなって。だから働きながら、ワーママとしての道を歩むんだらうなって、子育てするとなったら、って思います。

大日向氏：今、若い世代の人たちの生き方をめぐって、特に晩婚・晩産の傾向を否定的に社会は捉えがちですが、お三方の話を聞いていると決してそうではないなって、思えました。ちゃんご自分の人生設計考えて、キャリア・仕事のこと、そして子どもも欲しい、結婚もしたいと。でもそれにはキャリアとの両立とか、子育ての経費等の問題もしっかり考えている。だからこそ、そうした若い世代の夢がかなえられるような社会の取組、施策の取組が必要なんだということを改めて思いますね。それでは、ここからは会場からご質問をいただく時間を取れそうですが、いかがでしょうか？せっかく若い学生さんたちも来てくださっているし、素晴らしい取組をしていらっしゃるパネリストもいらっしゃるの、何かご質問等をいただければ有難いです。お手をお挙げいただけますか？

A：〇〇区に住んでいる〇〇と申します。実は先ほど個別にご挨拶したんですけど、池田さんが地域ケアプラザでパパ講座をされたときに、受講しました。今、第2次計画の素案に対してのパブリックコメントがあったので、いくつか意見を書いたんですけど、その中で一番言いたいのは、子育ては母親がするものだという考えがまだまだ多くて、父親として子育てをしようと思うと、まだなんとなくやりづらさがあるので、そこをもうちょっと啓発していただけないかな、ということ、意見として挙げさせてもらいました。子どもの居場所とかに行くと、まだまだ父親で来ている方って少ないし、公的にはそうは言っていないんですけど、例えば自治会館を開放して子育てサロンとかやっているもののチラシとか見ると、赤ちゃんとママのための集まりみたいなことが書いてあって、行ったからって「父親ダメです」とは言われないんですけど、まだそういうところで、なかなか入りづらいことがあるので、そこを改善してもらいたいなと思います。

大日向氏：とても大事なご意見有難うございます。その通りだと思いますね。そこが改善されないから、きっと若い女性たちが結婚にも躊躇するということでしょうね。結婚したらどれだけ男性が育児と一緒にやってくれるのかっていうことを、実感したいですね。池田さんみたいなパートナーだっ

たらいいでしょうけどね。貴重なご意見有難うございます。パブコメにもご意見を寄せてくださったんですね。有難うございました。他はいかがですか？

B：今日は有難うございました。〇〇区から参加した〇〇と申します。先ほど、子育て拠点に顔を出しにくいとか、心理的な壁があるというお話があったんですけど、私も今1歳になったばかりの子どもを育てていまして、「かなーちえ」さんとか、「スマイル・ポート」さんもお邪魔したことがあって、とてもいい場所だと思うんですけども、やっぱり、年齢的に若いお母さんがたくさんいらっしゃいますし、ちょっと最初の一步というのがすごく踏み出すのが、どういうことをやっているのかとか、なんとなくは分かるんですけど、とても踏み出しづらかった記憶がありまして。今もそんなにちょくちょくは行けていないんですけど、どうして行ったかっていうと、赤ちゃん訪問の時にボランティアの保育士さんが来ていただいたときに、チラシを見せて、こういうところがあるから是非、と笑顔で言ってくださったりとか、あとは地域ケアプラザでやっている赤ちゃん学級で、そこの方が来てくださって、実際に顔を見て、こういう方がやってくださっているんだなというのを見て安心した部分もありますし、あとは先ほど棒田さんがおっしゃっていた、そういう情報にどこから触れたらいいのかというのは、すごくハッとさせられるものがありまして、男性も女性もそうなんですけども、確かに産婦人科に通っている時期は、本当に実際に安全に出産が終えられるのかっていうことで頭がいっぱいになってしまうので、子育て拠点のことはすごく遠い未来のことに感じてしまっ。あとは、情報の管理だとかいろんな部分で問題もあるのかと思いますし、それよりもっと前っていうところで、いわゆる学校の部分から触れていくというのは、すごく大切なことじゃないかなと。あとは新鮮なのは、高校や大学・中学というのは導入しやすいと思うんですけど、企業の新入社員研修、これはすごく新鮮で。というのは、私はすごく男性が多い会社で、これから復職するにあたって、ものすごく壁が、ハードルが高くて、苦勞するんじゃないかなっていう不安があるんですけども、そういったところで、企業はまだまだ育児介護休業法っていう法律が制定されましたけども、なかなかやっぱり、法律最低限にやっておけばとりあえず指摘はされないだろうって捉えている部分が非常に大きいと思いますので、もっと社会全体で取り組んでいきたいと思いますところを、行政の力を借りてプッシュしていくことが出来たらすごくありがたいなという風に思っていました。

大日向氏：有難うございます。貴重なご意見として伺いました。他にいかがですか？

C：〇〇区の市民です。せっかく皆さんがいらしているので、質問があるんですけども、今ここにいらっしゃる皆さんは育児に非常に意識の高い方だと思うんですけども、仕事をしていた身からすると、ほとんどの権力のある人、例えば政治家だったりとか行政だったり、自分事ではない、当事者ではないという意識があろうかと思うんですけど、皆さんはそういったことで、政治参加ですとか全員が当事者なんだよ、という国家論として、どういう風に政治家とか行政に働きかけをしてきたのかっていうのと、これからどう持っていくのか、というところをまず皆さんに聞きたいのと、若い方たちの意見から、「子どもは産みたいけど結婚はしたくない」という意見はとてもよく分かって、婚姻関係になくても子どもを受け入れるという、とっても重要な社会文化というのがまだ形成されていな

いんですけれど、それをどういう風に次世代、自分たちの世代も含めて大学生は受け入れていくのかという、政治参加ですかね？その意欲についてお伺いしたいです。

大日向氏：有難うございました。とっても大事なご質問をいただいたと思います。私たち一人ひとりが当事者として関わる大切さを指摘して下さった貴重なお声ですね。子育てをまだまだ私事の範疇で他人事だという人の多い中で、どうやって「みんなで子育て」という考えを、政治や施策で訴えていったらいいでしょうか、というご質問をいただきました。それでは、今いただいたご質問へのお答えも含めて、パネリスト三人の方から最後に一言ずついただけますでしょうか。そして、学生の皆さんは、それらを聞いて、これから横浜で生きていく、あるいは結婚・子育てをしていくうえでの思いを語っていただければと思いますが、お願いできますか？

池田氏：確におっしゃるとおり、なかなか全員で考える、みんなで考える、自分事として捉えるというのはすごく難しい部分があるんですけど、例えばファザーリング・ジャパンですと、「イクボス」というのを訴えかけていて、各企業から子育てしやすいという「企業同盟」というのを作っていくのをお手伝いしています。政治（との関わり）は、ほぼ選挙しかないんですけど、サラリーマン時代には、「やはりこれはおかしい」ということで、一社員として子育て世代と連携して、もっと何かすべきじゃないかと提言したことがあるんですけど、私自身は、現役パパとしては手探りです。本当におっしゃる通りで、社会全体で男性の父親育児支援はまさにそんなんですけど、機運が上がっていかないと、なかなか動いてくれないんですね。もう一歩ずつしかないんですけど、アプローチだけ今は頑張っているような状況ですし、今日、学生さんもうちの子どももいるんですけど、未来の子育てに向けたアプローチが生きていかないといけないんですね。それを希望して、目指してやっているんです。父親育児支援講座をやっていると、父親の子育てってメリットしかないってママも言うんですね。なので、未来を創っていくためには、一歩ずつ、今の自分が出来ることをやることで、明るい未来、子育てしやすい未来を創っていきなと思います。

棒田氏：現在私がやっていることは、シニアの意識改革ですね。今の子育て世代の現状を知ってもらう。少子化っていうのは、お孫さんが産まれる方というのが少ないんですね。自分事として捉えてただけの方が減っているというのも、社会的な問題のひとつだと思っています。なので、シニア世代に今を分かっていたかく、ということで、行政がやっているシニア大学でお話しさせていただいたり。それから、あとひとつは災害対策というのをきっかけにして、もう一度地域で、自分たちが今から10年経ったときに誰と助け合って命をつないでいくのかとか、危機管理という切り口でも入っています。それから、私自身が大切にしていることなんですけど、なぜか子育ての話となると、上の世代の方たちから「女・子どもがワーワー騒いでいる」というようなことを言われることがものすごく多かったんですね。なので、モデルケースを作って、しっかりエビデンスを整えて、それを大学の先生であったり病院の先生たちですとか、思いを同じくしている人とチームになって、エビデンスをしっかり作って、それをもって話をあげていく、というような形を現在しています。そのなか

ら議員さんが出てきたり。モデルを作ったりデータを取ったりですとか、役割分担が必要だと思うんですね。そのあたりはチームとして出来るように進めていきたいとは思っています。

山田氏：横浜の子育ての広場、最初にできた「びーのびーの」は、約20年前に当事者の親御さんたちが、こういう場所があったらいいよねって立ち上げたところから、地域子育て支援拠点という国の施策になりました。これは当事者発の広場が、国の施策に変わっていったという大きな事例でもあるんですね。当事者が声をあげるということが、こういう親子の居場所を作ることになった。というひとつの大きな結果でもあるということは、是非お伝えしたいと思います。そして私が今、日々大事にしていることは、誰もがその時その時の色々な意味での当事者であるということです。介護をしていたら介護の当事者ですし、高齢の立場になれば介護をしてもらう立場で、自分はこれからどう生きていったらいいのだろうと考えます。日頃接しているのは、障害があったり、外国にルーツがあったり、それから心がちょっと疲れてしまっているけど、でも仕事頑張らなきゃいけない、という親御さんだったり、色々な方々と出会います。そういう時に、私がスタッフとして大事にしていることは、ちょっとその方の立場になってみて、その方がどう社会を見ているかを想像します。その人にちょっと入ってみて、こう見えているかな、そしてこういう1日を過ごしているのかなっていうことを想像してみるんです。そのなかで、ここはやりにくいだろう、ここはとても辛い思いをされているだろうっていうところを、「ねえねえ、こんな感じに思ってる?」「ここ辛かったりする?」っていう風に聞くようにするんですね。それが、どの世代であってもどの立場であっても、ちょっと想像力を働かせて、相手の立場になってみるのが大切と思っています。「見えないものを見ようとする力」というのを、先日、映画「みんなの学校」の木村泰子元校長先生から教えていただきました。見えないものを見ようとする力を一生懸命働かせて、その立場の声を私たちが代弁していけたらいいなと思っているので、それは子育て中の世代だけではなく、あらゆる世代、全ての人々に対しても、今日ここにいる皆さんが、自分の周囲にいる方の、ちょっと相手の立場に立ってみると、見えなかった世界が見えてくるかもしれないので、是非そんな素敵な大人がいる横浜になってくれるといいなと思っています。そして、最初にお話した「びーのびーの」が出来てからもうすぐ20年、子育て広場で育った人たちが、お父さんお母さんになるかもしれません。そうなったら、横浜はこれからどうなるのかな、というのをちょっと楽しみに考えています。今日は有難うございました。

燕昇司氏：今日は、とても貴重な時間を有難うございます。まだ学生なので、政治に、というのは難しいんですけど、今自分にできることは何かになって考えたときに、当事者視点というので、自分もいずれは子育てするかもしれないし、実際今インターンとして活動している周りの人たちは子育てに関わる人たちが多く、そういう人たちがどういう風に関わっているのかなっていう、人との関わりの部分で、大人とか子どもとかいろんな人と出会って、それが自分が当事者の視点を身につける方法なのかな、という風に思っています。私は保育の勉強をしているので、子どもが好きだし、子育てのイメージもつくけど、私妹がいるんですけど、妹は子どもとか全く興味ないし、っていうのが現実というか、同じ家庭で育っても考え方は違うし、そういう身近にいる友達とか妹とかもそうなんですけど、そう

いう人たちに伝えられることはあるのかなっていう風に思ったので、今日のことを色々振り返って考えてみたいと思いました。

奥田氏：さっき、棒田さんから意識改革というお話をしていただいたんですけど、私もまだ政治参加という面ではまだまだかな、というところもありますので、その意識改革と言った部分で、子育てが他人事だって思っている男性の方にアプローチをしていって、男性の育児参加が当たり前になって、イクメンって言葉が、いい意味でなくなるように活動していけたらいいなと思っています。そのアプローチの仕方に関しては、またこれからじっくり考えていければなと考えております。本日は有難うございました。

西江氏：今日は有難うございました。政治は、私にできることは、一番の近道は選挙に行くことだと思って、それこそ高校でもそういう勉強をしていて、私も行けるのは全部行って、そこからだなんて思っているのと、それを広めていくのと、意識改革や子育てに関することも、私の学校には保育現場に行っている子たちも多いんですが、保育現場に行っても、子育てに関してはちょっと違うという認識を持っていたりするので、そこの部分をどう変えていくのかということも課題なのかなと、今日色々な話を聞いていて思いました。今日は有難うございました。

大日向氏：有難うございました。確かに20年経っても変わっていないとか、さらに言うと、少子化対策が始まって半世紀位経つのですが、いまだに？ということは正直あります。でも、山田さん、棒田さん、池田さんがおっしゃってくださった通りで、横浜に、たとえば子育てひろば「びーのびーの」ができて20年経って、今、横浜にこんなに素敵な若い世代が育ってくれているというのは、とてもうれしいことですね。未来へ巣立つ子どもたちに向けて、夢と希望を捨てずに、あきらめず焦らず、1歩1歩進んでいくということが本当に大事だということを、改めて今日学ばせていただきましたし、それを本当に確かに出来ると思える素晴らしいパネリストの方々の実践とメッセージ、そして若い世代のメッセージもいただきました。本当に有難うございました。それでは、これを持ちまして、今日のフォーラム、終わらせていただきます。

#### ※ 当日ご紹介した、地域における子育て支援の取組事例

- ・家族シミュレーション（港北区）
- ・すくすくかめっ子～親子のたまり場～（神奈川区）
- ・ウェルカムベビープロジェクト（戸塚区、鶴見区）
- ・子育てサロン「サロンおあしす」（泉区）
- ・「子育て地図」つるみまっぷ（鶴見区）
- ・子育て万歳サロン（西区）
- ・パパサークル「つるPaPa」（鶴見区）